

『ピューティア祝勝歌第 11』における正義と嫉妬について

櫻内 理恵

序

ピューティア祝勝歌第 11 は、抒情詩人ピンダロスがピューティア祭の少年の部の徒競走で優勝したトラシュダイオスに捧げた合唱祝勝歌である。トラシュダイオスは、ピンダロスと同郷でテーバイ出身である。彼の一族は、かつてオリュンピア祭とピューティア祭で優勝したことがあり、この度のトラシュダイオスの勝利は、この一族にとって 3 度目の栄冠であった。

この祝勝歌は、64 行という比較的短いものであるが、その内容の解釈について、特にこの中で歌われているアトレウス家の神話伝説とその後の格言について様々な議論がなされてきた。ここに含まれているアトレウス家の伝説は、悲劇作家アイスキロスの「オレスティア」3 部作の初めの 2 作品『アガメムノーン』『コエーポロイ』と同じ題材を扱ってたものであるが、ピンダロスは何故ピューティア祝勝歌第 11 でアトレウス家の伝説を語ったのか、血と復讐に満ちたこの伝説が讃歌とどのような関係があるのか。またその後の格言がこの伝説とどのように関わっているのか、伝説と格言と勝者への讃歌がどのようなつながりを持っているのかということが議論されてきたのである。またこの作品の創作年代は、474 年か 454 年か意見が分かれ、このアトレウス家の伝説と 458 年のアイスキロスの「オレスティア」3 部作との関係も問われている（注 1）。

この論文は、アイスキロスの作品との関係を問う前に、ピューティア祝勝歌第 11 には、アットランダムに様々なものが入り込んでいるのではなく（注 2）、ここで歌われているアトレウス家の伝説もその後の格言もピンダロスの一貫したテーマのもとに述べられているという立場でこの作品を解釈していこうとするものである。ここでは「正義」と「嫉妬」という 2 つの言葉をキーワードとして考察していきたい。

この作品は、勝者の故国テーバイに関わりの深い女神たちへの呼びかけと勝者への賛美の冒頭部分（1 行～16 行）から始まり、アトレウス家の伝説（17 行～37 行）、伝説の中斷、勝者への讃歌、格言（38 行～58 行）が歌われ、そしてテーバイに縁の深い神々への讃歌（59 行～64 行）で終わっている。

冒頭部分（1 行～16 行）

この祝勝歌の冒頭部分から考察してみたい。この作品は、テーバイ王カドモスとハルモニアの娘セメレーやイーノー・レウコテアそしてテーバイの英雄ヘーラクレースの母アルクメーネーへの呼びかけで始まる。そして彼女たちは、「メリナーの元に、黄金の鼎ある宝庫なる社

へ」と集まるように促される。そこは、「ロクシアス（アポローン）が何よりも称えられるところ」であり、「予言者たちの真実の御座として、イスメーニオスと名づけられた」ところである。メリナーは、オーケアノスの娘たちの一人であり、アポローンとの間にイスメーニオスとテーネロスの二子をもうけた女性である。彼女は、テーバイ近郊にある息子の名にちなんだアポローン・イスメーニオスの神殿で崇拝された。テーバイに縁深い貴婦人たちは、このイスメーニオスの神殿すなわち「黄金の鼎ある宝庫なる社」へと集められるのである（1行～6行）。

そして、次のように歌われる。

ここで、アポローン神が、この地に住まう貴婦人たちに
つどい集まるように命じるのである。
夕暮れ時に聖なる捷と
大地の臍ピュートーの真っ直ぐな正義を讃えるために。（7～10行）

ここでは、テーバイに縁ある彼女たちがアポローンに「聖なる捷とピュートーの真っ直ぐな正義を讃える」ように促されると言われている。「聖なる捷とピュートーの真っ直ぐな正義」とは、何を意味するのであろうか？

普通確固不変の捷（θέμις）は、擬人化され女神テミスとしても知られる（注3）。彼女は、ヘーシオドス以来大変有力な女神であり、ピンダロスも女神テミスを女神ディカ（正義）やエイレーネー（平和）やエウノミア（秩序）の母（*Ol. 13, 1-10*）とし、重大なことを時宜にかなって決定するためゼウスの傍らに立つ（*Ol. 8, 22*）女神としている。そしてまた、「選ばれた競技の誉れを称えよと、ゼウスの捷は告げている。」（*Ol. 10, 24*）と歌われ、競技での勝利がゼウスの意志にかなったものであることを表している。このピューティア祝勝歌第11の9行目も同様の意味で述べられていると思われる。すなわちこの競技がゼウスの意志にかなったものであることを表しているのであろう。

またピュートーは、アポローンの聖地であり、世界の中心、すなわち「大地の臍」と呼ばれた所である。ここでは、第一に女神ガイアが、そして次に女神テミスがこの地の守護神とされていた。ピューティア祭の競技は、このピュートーの地でアポローンに捧げられたものである。

ピュートーの「真っ直ぐな正義 ὄρθοδίκας」について考えてみたい。ピンダロスでは、女神テミスの娘である女神ディカは、私利私欲やヒュブリス（傲慢）を憎む（注4）と言われる。神々に対する人間の正義とは、神々の領分を侵さないこと、人間としての分際を弁えることである。人間が神々の特権である永遠の命や永遠の至福を求めるることは、神々の領分を侵すことでありヒュブリスに陥ることと考えられる。ペーガソスに乗って天に昇ろうとしたペレロポンテースは、「正義に反した者」と言われる。このためにペレロポンテースは、ペーガソスから振り落とされた。これについてピンダロスは、「正義に反した幸せには、最も辛い最後が待ち受けている」と述べている（注5）。神々は、人間に正義にかなった生活をすることを求める。これに反する行いは、神々に対する不正行為である。このような行為は、神々の罰を免れないものである。（注6）。そして、このような神々が人間に求める「正義にかなった町は、

決して崩壊することがない」(Pyth. 8. 22)とも言われているのである。

ピューティア祝勝歌第11の10行目で言わわれている「ピュートーの真っ直ぐな正義」とは、ピュートーの神アポローンが人間に求めるこのようない正義、そして正義の裁定を意味すると思われる。勝者トラシュダイオスは、アポローンの意図する正義にかなう人間なのである。彼は、ゼウスの掟とアポローンの正義にかなった人間として今回の勝利を得たのであろう。すなわち、勝者のこの度のピューティア祭での勝利は、神々に認められた正当なものなのである。

しかしながら一方で、ピンダロスは、「それぞれにそれぞれの習慣がある。そして、各々は自分の正義を語る。ἄλλο δ' ἄλλοισιν νόμισμα, σφετεραν δ' αἰνεῖ δίκαν ἔκαστοες」(Fr.203)「強者は、以前の正義を廃止する。κρέσσων δέ καππαύει δίκαν τάν πρόσθεν ἀνηρ」(Nem.9.15)とも述べている。この作品の10行目には当てはまらないが、ピンダロスは、常に絶対的なものではなく、相対的な意味でも正義を考えていたのである。

この讃歌の冒頭部分では、トラシュダイオスが聖なる掟とアポローンの真っ直ぐな正義のもとで勝利したことが述べられた後、この勝者は自分の一族に3つ目の栄冠をもたらしたことが告げられる。これは、勝者の祖国テーバイとピュートーに近い町キラにもたらされた恩寵でもある。そしてまたキラの地は、オレステースの親友ピュラデースの祖国でもある。トラシュダイオスは、「ラコニアのオレステースの友ピュラデースの豊かな土地での勝者」(15行～16行)であると歌われ、ここからアトレウス家の伝説に入っていく。

アトレウス家の伝説（17行～37行）

アトレウス家の伝説は、次のように歌われる。

実際、父の暗殺の折り、乳母アルシノエーは、
クリュタイメーストラーの残酷な手と残忍な裏切りから
彼（オレステース）を救った。
この冷酷な女性が、ダルダニアのプリアモス娘カッサンドラーを
アガメムノーンの魂と一緒に白い青銅（の刃）で
アケローンの影成す岸に送った時に。

祖国から遠く離れたエウリーポスでイーピゲネイアが殺されたことが、
彼女を過酷な怒りを駆り立てたのか。
あるいは他の男との夜の添い寝が、彼女を征服しそそのかしたのか。
この罪は、若妻たちに憎むべきいまわしいものであり、

他人の舌に覆いをすることはできない。
市民は悪口をいうものなのだ。
繁栄は、少なからぬ妬みをもたらすのだから。

卑しき者たちは、気づかれることなくつぶやく。
アトレウスの英雄なる息子（アガメムノーン）は、ついに
名高いアミュークライに帰ってきた。死ぬために。

彼は、予言者である娘（カッサンドラー）を殺すことになった。
ヘレネのために、火を放ち、トロイアの家の幸福を奪った時に。
若者（オレステース）は、パルナッソスのふもとに住む年老いた友、
ストロピオスのもとにたどり着いた。
そしてついに、彼はアレースの助けで
母を殺害しアイギストスを血の海に沈めた。

（17～37行）

トロイア戦争の折り、敵国トロイアへ向かうためギリシア軍が結集し出帆しようとした時、軍の総大将でアミュークライの王（注7）アガメムノーンが女神アルテミスの怒りをかったため、無風が続き船が出港できなくなった。アガメムノーンは、これを打開するため予言者の言により娘のイーピゲネイアをアルテミスに捧げなければならなくなつた。アガメムノーンは、妻のクリュタイメーストラーとイーピゲネイアを騙して船に呼び寄せ、到着するなり、この娘を生贊に捧げた。これ以来、クリュタイメーストラーは、アガメムノーンを憎むようになった。またクリュタイメーストラーには、アイギストスという愛人がおり、アガメムノーンのトロイア遠征中は、夫婦のごとく振る舞い国を支配していた。クリュタイメーストラーとアイギストスは、トロイア戦争に勝利し帰国したばかりのアガメムノーンと彼が戦利品として連れて来たトロイアの娘カッサンドラーを殺害した。その時、幼かったオレステースは助け出され、ボーキスのキラに送られ従兄弟のピュラデースと共に養育される。やがて彼は成人し、父親の復讐をせよというアポローンの命令に従って帰国し、親友で従兄弟のピュラデースと共に母クリュタイメーストラーとアイギストスを殺し、父の復讐を遂げる、というのがよく知られているアトレウス家の伝説である。

17～37行では、クリュタイメーストラーは「冷酷な女性」であり、夫とカッサンドラーを殺害し、また息子のオレステースも殺害しようとしたと言われている。ピンダロスは、その動機がイーピゲネイアを生贊にされたことによる憎しみであるのか、あるいはアイギストスという愛人の存在のためなのかわからないという。しかしいずれにせよ、市民は、彼女の行為について「悪口を言う」のである。なぜなら「繁栄は、少なからぬ妬みをもたらす。卑しき者たちは気づかれることなくつぶやく。*ἴσχει τε γὰρ ὅλβος οὐ μείονα φθονονόδε χαμηλὰ πνέων ἀφαντον βρέμει.*」のである。

「卑しき者たちは、気づかれることはなくつぶやく*ἀφαντον βρέμει.*」は、サンディ以来ほとんどの研究者によって「大志を持たぬ人々は、気づかれずにぶつぶつつい」と解釈されてきた（注8）。これに対して、ゲルバーは、この箇所を嫉妬を引き起こす繁栄したものとわめいても気づかれない貧しい人々の対比と考えた（注9）。ヤングやハバードも、豊かな人々に対

する貧しい人々の一般的な感情であると解釈している（注10）。

では、*ἄφαντον βρέμει*は、いかに解釈されるべきであろうか。クリュタイメーストラーの夫殺害の動機は、娘が生贊にされたことのあるいは愛人の存在にあるとピンダロスは述べており、彼女は、大志を抱いて夫を殺害したわけではない。彼女の行為は、憎まれるべきものであり、市民の悪口のもととなった。また、夫殺害は、大志を抱く者が憧れる行為とも考えられず、大志を抱けぬものに嫉妬を起こさせるものとも思われない。

さらにここでは「繁栄は、少なからぬ妬みをもたらす」と言われている。「繁栄」は、クリュタイメーストラーが夫を殺害したことによって得たものではなく、この国の支配者という彼女の地位によるものである。一般市民の嫉妬を引き起こすのは、クリュタイメーストラーが、愛人と共にこの国を支配しているという事に対してであろう。従ってこの箇所は、市民がクリュタイメーストラーの繁栄した状態に嫉妬しているのだと考えられる。それ故ここは、「豊かな人々に対する貧しい人々の感情」と解釈すべきであると思われる。一般市民は、クリュタイメーストラーの夫殺害の動機という事の本質はともかく、その豊かさと繁栄に嫉妬するのである。

その後アガメムノーンのトロイア戦争での行為が語られる。彼は、「ヘレネのために、火を放ち、トロイアの幸福を奪い」、そして「予言者の娘を殺すこととなった」。アガメムノーンは、トロイア戦争の英雄であるが、ここではアガメムノーンの英雄像が讃えられているとは思われない。クリュタイメーストラーは、残酷な女性であるが、アガメムノーンもまた、火を放ちトロイアを滅ぼした冷酷な男である。そして、父の復讐に戻ってきたオresteasが母と愛人を殺害した事が述べられ、この伝説は終わっている。

では、ピンダロスは、この伝説で何を語ろうとしたのであろうか。冒頭では、勝者トラシュダイオスが、聖なる捷とピュートーの正義にかなってピューティア祭で勝利した事が歌われていた。しかし、続くアガメムノーンのトロイア制覇とクリュタイメーストラーの夫殺しには、ゼウスの捷やアポローンの「真っ直ぐな正義」との関わりが見いだせない（注11）。むしろここには、ピンダロスが述べている神々に対する人間の絶対的な正義とは異なるもう一つの正義、すなわち「各々は自分の正義を語る」や「強者は、以前の正義を廃止する」というようなより強い者が正義となる相対的な意味の正義が考えられるのではないだろうか。そしてここでは、ピンダロスがアガメムノーンやクリュタイメーストラーの行為に、すなわちこのような正義の在り方に賛同しているとは思われない。

また繁栄を謳歌しているクリュタイメーストラーは、市民から悪口を言われ妬まれるが、この市民の嫉妬が、冷酷な女性クリュタイメーストラーに対する正義であるとも思われない。考察してきたように、他人の繁栄を妬むものは、「卑しき」市民であり、「気づかれることなくつぶやく」のであり、これは「豊かな人々に対する貧しい人々の感情」である。クリュタイメーストラーもアガメムノーンも、神々に基づく正義とは無縁であるが、繁栄し幸運であった。そして卑しき一般市民は、自分よりも繁栄している人々を妬むのである（注12）。ピンダロスが、このような市民に賛同しているとは考えにくい。

このように、アガメムノーンとクリュタイメーストラーの生き方は、「強者は、以前の正義

を廃止する」という相対的な正義であった。そして他人の繁栄を妬む市民も、自分より繁栄している人を羨むという相対的なものである。ここでは、冒頭で述べられていたような神々に由来する絶対的な正義とは全く異なる流動的な人間界の在り方が示されていると考えられるのである。

しかしこの伝説の最後では、このような在り方に終止符が打たれていると思われる。オレステースが帰国し、母とその愛人アイギストスを殺した。ここでは、彼の母殺しの正当性も不当性も述べられていない。しかし彼の復讐がアポローンの命によるものであることは、よく知られるところである。この祝勝歌の冒頭部分からアトレウス家伝説への移行は、キラという地がオレステースの親友ピュラデースの祖国であるという地理的な関係により行われている。しかし、オレステースは、キラからアポローンの命令により帰国しアガメムノーンの復讐を果たしたのである。

オレステースは、アポローンの神託に従って復讐を果たすことで、強き者が弱きものを制覇するアトレウス家の在り方を絶対的な神々の正義にかなうものに変えたのだと考えられる。すなわちオレステースは、「ピュートーの真っ直ぐな正義」を実現したのである。冒頭では、トラシュダイオスがアポローンの正義にかなって勝利したことが述べられていた。このように、アポローンの正義にかなう人間という点で、勝者トラシュダイオスとオレステースの行為が重なり合う。アトレウス家の伝説は、オレステースの名で始まり、彼の復讐の達成で終わっている。これは、二人の類似を強調するためではないかと思われる。(注13)。

格言について（38行～58行）

アトレウス家の伝説は、37行で終わる。続くスタンザでは、ピンダロスは、「方向を変える岐路にやってきた」（38行）とし、この祝勝歌で述べてきた方向を「違うテーマから違うテーマへと」（41行）変えることを宣言する。続けて彼は、「狼狽している。真っ直ぐに道を歩いてきたのだが。風が私を海の小舟のように航海の外に投げ出したのか。」（39－40行）と述べている。どのような言葉は、思いがけない方向に話題が逸れてしまったような印象を受けるが、ここは、神話伝説を終え次のテーマに移るため、「神話を短く切り上げねばならない」「ここでこの話をやめねばならない」という意味に理解すべきであろう(注14)。前述したように、この祝勝歌の冒頭部分からアトレウス家の伝説への移行はオレステースの名で始まり、伝説の最後もオレステースの行為で終わっていた。ピンダロスは、勝者とオレステースの類似を示したところでこの伝説を完結させたと考えられるのである。

こうして話の方向が変えられ、勝者トラシュダイオスとその一族の栄光が歌われる。彼の一族は、かつてオリュンピア競技とピューティア競技で優勝したことがあり、今回の彼の勝利が一族にとって3度目の栄冠である。今回の競技で、トラシュダイオスは、脚の速さでギリシア中の人々を圧倒した。(43行～50行)

続けて、ピンダロスの格言が述べられる。それは、次のようなものである。

私に神々からの恩恵を与えたまえ。
人生において可能なものを求められますように。
私は、国中の様子を見て、
より長き繁栄のために中庸の栄えを見出した。
僭主の運命をよしとはしない。

私は人々と分かち合う徳に関心がある。
嫉妬するものどもを近づけないのである。
もし、誰か最高のものを得て、平穏に暮らし、
恐ろしいヒュブリスを避けたなら、
彼は、暗い死よりも愛すべき終わりを得るであろう、
愛する子供に名声の贈り物となる最高の富を残して。(50 b ~ 58行)

ここでピンドロスは、「人生において可能なものを求める私に「恩恵を与えて」くれるよう願っている。「私に」とは言っているが、祝勝歌で勝者を讃えながら、ピンドロスが自分自身にだけ神々の恩恵を求めるとは考えられない。これはおそらく、言葉通りピンドロス自身についての願いでもあるが、また彼がこの祝勝歌を捧げている勝者についての願いでもある。ピンドロスは、しばしば祝勝歌の中で勝者の立場に自分を置き換える一人称で神々に祈る方法を探っている(注15)。ここでも同様に、「可能なこと」を求める勝者と自分の双方に恩恵を与えてくれと願っていると考えられる。

「人生において可能なこと」とは、人間にとって相応しいもの、人間の分際を越えないことであろう。同様のことは、ピューティア祝勝歌第3においても言われている。「我々は、死すべき人間の心に相応しいことを神々に願わなくてはならない、足下近くにあるのは何か、我らの分は何かを弁えて。我が魂よ、不死なる者の命を求めず、手の届く者に力を尽くせ。」(注16)。人間は、その分を越えずにその時々に相応しいものを求めるべきである。これは、ピンドロスの述べる神々に対する正義にかなった人間の在り方である。ピンドロスは、このような正義にかなった生活をトラシュダイオスと自分に願っているのである。

続けて「より長き繁栄のために」は「中庸の栄え」が必要であると言われる。ピンドロスは、「僭主の運命をよしとはしない。」と言う。「僭主の運命」とは、「長い繁栄」を保つことができなかつたアガメムノーンやクリュタイメーストラーに当てはまるであろう。ここで言われる「僭主」は、現代的な意味ではなく「豊かで力ある支配者」を意味していると思われる(注17)。そして「人々と分かち合う徳に関心がある。嫉妬するものども近づけないのである」と言う。クリュタイメーストラーは、その繁栄のため市民の妬まれると言っていた。しかし、ここで言われる「嫉妬するものども φθονεροι」とは、クリュタイメーストラーを妬んだ「卑しき」市民を指すのであろうか。

この「嫉妬するものども」を考察するために、続く部分を見てみたい。そこには、ピンドロスの考える人間の理想的な生き方が述べられている。誰かある人が「最高のものを得て、平穏

「*κούχη*に暮らし、恐ろしいヒュブリスを避けたなら」その人は、「愛する子供たちに名声という贈り物を残して」、すなわち死期を迎えてもその名声が消えることなく子孫へと受け継がれ、「暗い死よりも愛すべき終わりを」すなわち幸福な死を迎えるであろうと言われる。ここで示されている生き方は、肉親に殺害されたアガメムノーンやクリュタイメーストラーの例で示された「僭主の運命」と全く異なるものと考えられる。

ここでピンドロスは、人間が幸福に最後を迎えるための条件として平穏をあげ、ヒュブリスと対比させている。ピンドロスは、平穏を女神ヘシキアとし初めて擬人化したことで知られている。女神ヘシキアは、女神ディイカの娘であり、しばしばヒュブリスに敵対する力として述べられる（注18）。平穏は、国家間の戦争に対する平和を、また個人の平穏な生活をも意味するものである（注19）。そして、平穏と対比されるヒュブリスは、女神ディイカを始め、神々が憎むものである。ヒュブリスに陥った者は、神々によって滅ぼされる（注20）。平穏と正義とこれらと対比されるヒュブリスは、ピンドロスが神々に対して人間が取るべき態度について語るとき、しばしば言及されるものである。この50 b行から58行には、ピンドロスが人間の正義を語るときに使われる言葉が多く現れているのである。

トロイアに火を放ちカッサンドラーを愛人とし結果的に彼女を死に至らしめることとなったアガメムノーンも、夫を殺し愛人と暮らしたクリュタイメーストラーも平穏を得ることができなかつた。彼らは、「人生において可能なものを求め」ようとなかつたであろう。彼らは、「人々と分かち合う徳」よりも自分たちの生活に心を奪われ、ヒュブリスに陥ったのだと考えられる。彼らは、神々の正義に反する者なのである。この格言で、ピンドロスは、このような生活をしてはならないと述べているのである。

では、ここでの「嫉妬するものども」とは誰なのであろうか？「嫉妬 *φθόνος*」については、ソロモン以来、頻繁に神々の嫉妬と人間の嫉妬が言われてきた。ピンドロスも他の祝勝歌において神々の嫉妬についても人間の嫉妬についても言及している。前述したように、クリュタイメーストラーの受けた嫉妬は、「卑しき」市民が「つぶやく」ものであり、これは人間の正不正には関係がなく、人目に目立った人間に対するやっかみである。ピンドロスは、競技会において勝利を逃し栄光に到達できない人々について、彼らは「大地に倒れ、嫉妬深く眺め、暗闇でもむなしい決意を振り回すのだ」（*Nem.4.39*）と述べ、このような人間の嫉妬に対して不快感を表している（注21）。

しかしながら彼は、神々の嫉妬を恐れ、勝者の幸運を「神々の嫉妬が台無しにすることがないように」（*Isth.7.39*）としばしば祈っている。神々の嫉妬は、人間の分を越えて幸運すぎるものや賞賛され過ぎたものに向けられるものである（注22）。人間は「人生において可能なこと」を求め、己の分を越えてはならないものである。人間がそれ以上の幸福を求めるならば、神々の怒りあるいは嫉妬を招く。それは人間にとて神々への不正行為なのである。このように、神々の嫉妬と人間の嫉妬の意味するところは異なっている。すなわち、人間としての生き方や正義と関わる神々の嫉妬と、他人に対する単なるやっかみであり正不正とは関係のない人間の嫉妬である。

考察してきたように、50 b～58行の格言では、神々に対する人間の在るべき姿、正義にか

なった生活が述べられている。アガメムノーンやクリュタイメーストラーは、これとは異なる生活を求めるヒュブリスに陥った。このように神々の正義に反した彼らを罰するのは、「卑しき」市民ではなく、神々であると思われる。従ってここで言われる「嫉妬するものども」は、人間の単なるやっかみではなく、神々の嫉妬について述べられていると考えるべきではないだろうか。ギルダースリーヴは、「嫉妬するものども」を神々と人間両方を含んでいると解釈しているが、ヤングやゲルバーを始めとして多くの研究者がこの箇所を29行と同様に市民の嫉妬と解釈をしている（注23）。しかし、考察してきたように、この「嫉妬する者ども」は「神々の嫉妬」と解釈されるべきである。すなわちピンダロスは、この格言で勝者に望む正義にかなった生き方を歌い、その中で神々の嫉妬を近づけてはならないと述べていると考えられるのである。

アトレウス家の伝説で述べられていた正義や嫉妬は、流動的な人間界の相対的なものであり、ピンダロスはこれをよしとはしていなかった。しかしオレステースがこれを神々の意志にかなった絶対的な正義に変えた。そしてこの格言では、以前のアトレウス家の在り方とは異なる神々に由来する正義や嫉妬が述べられている。これはピンダロスが理想とする人間の生活の在り方である。

アトレウス家の伝説では、アポローンの正義にかなった人間という点でオレステースとトラシュダイオスの姿が重ねられていた。しかしピンダロスは、勝者一族をアトレウス家のようにであったと述べているのではない。この祝勝歌では、アトレウス家の伝説の後、勝者一族の素晴らしさが讃えられ、この格言が歌われている。ピンダロスは、今は幸福の極みにいる勝者とその一族に、より長い幸福のためにはアガメムノーンたちのような僭主の生活ではなく神々の正義にかなった生活をせよと告げているのだと思われる。すなわちこの格言のために、アガメムノーンとクリュタイメーストラーの例があげられたのであろう。

このように、この祝勝歌は、全体を通して「相対的な正義」と「絶対的な正義」、「人間の嫉妬」と「神々の嫉妬」、「僭主の生活」と「中庸の榮え」が対比されており、相対的な人間の世界と絶対的な神々の世界とが明確に区別されている。この2つの世界の対比を言い表すために、ピンダロスは、アトレウス家の伝説やこの格言を述べたのだと考えられるのである（注24）。

神々への讃歌（59行～64行）

オレステースとピュラデースの友情が壊れることはなかった。この祝勝歌の最後には、同様に永遠の友情関係を保ったものたちが並べられている。

このような（名聲となる）贈り物が、
イーピクレースの息子、イオラーオスの栄光を
歌で讃え広めた。
またカストールの力を讃え広めた。
そして、神々の息子たちよ。王ボリュデウケースよ。汝を讃え広めるのだ。
ある時にはテラプナに住み、ある時にはオリュムポスに住む汝を。

(59～64行)

ここで名を挙げられているイオラーオスは、ヘーラクレースの甥で御者としてヘーラクレスの数々の偉業を助けた功労者である。彼は、またテーバイの競技大会の守護者でもある（注25）。そして、クリュタイメーストラーとヘレネの兄弟であるポリュデウケースとカストールの双子も互いに忠実であったことが知られている。彼らは、神々に愛され、正義を守り、互いを裏切ることがなかった。彼らは、ピンドロスが格言で述べた理想的な人物像であると思われる（注26）。このようにして、この祝勝歌は終わっている。

まとめ

以上考察してきたことをまとめてみたい。

冒頭部分では、勝者トラシュダイオスは、ゼウスの掟とアポローンの正しい裁定によって勝利を得た事が述べられていた。これは、彼の勝利が神々の意にかなったものであったことを示していた。

続くアトレウス家の伝説では、後の53行で述べられる「僭主の運命」の例が、アガメムノーンとクリュタイメーストラーによって表される。彼らの在り方は、強者が弱者を滅ぼすという相対的な正義に則ったものがあった。彼らには、神々が人間に求めるような絶対的な正義はない。またクリュタイメーストラーがその繁栄のために市民から受けた嫉妬もまた、自分よりも恵まれた人に対しての相対的な感情であった。ここで描かれているのは、全てが相対的に計られ、神々の要求する絶対的な世界とは無縁の人間界の出来事である。

しかしアトレウス家の人オレステースは、アポローンに命じられて帰国し、このような相対的な正義に終止符を打った。彼は、アポローンの「真っ直ぐな正義」に従って行動したのである。トラシュダイオスもまたアポローンの「真っ直ぐな正義」にかなって勝利し、祖国に戻った。ここには、オレステースと勝者トラシュダイオスとの類似が見られるのである。

ピンドロスは、オレステースと勝者を重ね合わせたが、勝者の一族がアトレウス家のように言っているのではない。確かに勝者の一族は、幸運という点でオレステースの両親と重なり合う。しかしアガメムノーンやクリュタイメーストラーの運命は、ピンドロスが勝者とその一族に望む者とは正反対のものである。勝者の一族を讃えた後に続く格言で、ピンドロスは、長い幸福のためには「僭主の運命」よりも「中庸の栄え」が大切であると述べている。トラシュダイオスの一族は、今3度目の勝利を得て幸福である。しかし、アトレウス家のようになってはならない。そうではなく、ヒュブリスに陥らずに平穏に暮らしたなら、神々の嫉妬も寄せ付けず繁栄し続けるであろう。

このように、ピンドロスは、この作品において人間社会の相対的な正義や嫉妬と神々に由来する絶対的な正義と嫉妬を明確に対比させて、幸福の真っ直中にある勝者とその一族にあるべき姿を示したのである。

そして最後にピンドロスがこの祝勝歌で述べようとした神話に現れる理想的人物の名があげられ、この祝勝歌は終わっているのである。

注

- (1) 年代によっては、アイスキュロスがピューティア祝勝歌第11の影響を受けた可能性があり、あるいはその逆もあり得る。その研究はM. Bowra, *Pindar*, Oxford, 1964, Appendix I.D.C. Young, *Three Odes of Pindar; A Literary Study of Pythian 11, Pythian 3 and Olympian 7*, Leiden 1968, pp.1-26.に詳しい。Bowraは、454年を指示している。B.Gildersleeve, *Pindar: The Olympian and Pythian Odes*, New York 1885.のように、当時のテーバイの政治状況とピンダロスの見解から考察すると474年が支持される。またアイスキュロスとピンダロスの表現法やテーマの一一致を見る方法がある。この方法で、474年とするのは、P. Vivante, *Pindar, Pythian 11, 1-12, Proceedings of the First International Conference on Boeotian Antiquities Montreal 1972*、F. J. Nisetich, *Pindar's Victory Songs*, Baltimore and London, 1980, S. J. Instone, *Pythian 11: Did Pindar Err?* *CQ* 36(1986) p.86-94を始め多い。454年を指示するものは、J.H. Finley, Jr., *Pindar and Aeschylus* Cambridge, Mass. 1966, John Herington, *Pindar's Eleventh Pythian Ode and Aeschylus' Agamemnon, Greek Poetry and Philosophy*, Chico, 1984, T. K. Hubbard, *Envy and the Invisible Roar Pindar, Pythian 11.30, Greek-Roman and Byzantine Studies*, Vol 31 1990 pp.343-351。
- (2) M. L. West, *Ancient Greek Literature*, ed K.J. Dover, Oxford, 1980 p.46
- (3) B. Gildersleeve, op. cit. p.119, W. J. Slater, *Lexicon to Pindar*, Berlin 1969. p.232, J. E. Sandys, *Pindar*, The Loeb classical Library, London, 1978, p.298は、この箇所をΘέμιςすなわち女神テミスとしている。
- (4) *Pyth.8.1-12, Ol.7.17, Ol.13.10*
- (5) ベレロボンテースの神話は、*Isth.7.42-48*。
- (6) *Ol.1.54-62, Pyth.3.45-58, Pyth.4.90-92.*、*Pyth.2.29*に同様の見解が見られる。G. Kirkwood, *Selections from Pindar*, American Philological Association, 1982, p20, ロイド・ジョーンズ著、眞方忠道、眞方陽子訳「ゼウスの正義」岩波書店、1983、p.82、拙書「ピンダロスにおける正義について」「文明研究」第9号 p.15-22、第13号（1994）。
- (7) アガメムノーンは、ミュケーナイまたはアルゴスの王とされているが、後代の伝えではラケダイモーンのアミュークライ市（アムクライ）の王ともいわれる。
- (8) J. E. Sandys, *Pindar*, op. cit. p.298,
- (9) D. E. Gerber, *Pindar, Pythian 11.30, GRBS* (Vol. 24) 1983, pp.21-26
- (10) D. C. Young, op. cit. pp.1-26, T. K. Hubbard, art. cit. pp.343-351
- (11) M. Bowra, *Pindar, Pythian X I, CQ* 30 (1936) p.129-141, B. Gildersleeve, op. cit. p.357-358, F. S. Newman, *The Relevance of the Myth in Pindar's Eleventh Pythian, Helenika* 31 (1979) p.153-156, F. J. Nisetich, op. cit. p.219は、この冒頭部分は、地理的な関係でアトレウス家の伝説に繋いでおり、内容的には最後の部分と結びついているとしている。
- (12) 他に、*Nem.4.37-41, Nem.9.5-7*でも同様の事が言われている。
- (13) 同様に、オresteースと勝者とデルフォイの正義を結びつけた研究は、R. B. Egan, *On the*

Relevance of Orestes in Pindar's Eleventh Pythian *Phoenix* 37, 1983. p.189-200。オresteースも自分の家を滅ぼしたアトレウス家の一人と考えているのは、F.S.Newman, *art.cit.* pp.44-64。B.Gildersleeve, *op.cit.* pp. 357-359, D.C.Young, *op.cit.* pp.1-26.は、神話の英雄と勝者は関係がなく、オresteースは、53行以下と結びついているとしている。S. J. Instone, *art. cit.* pp.86-94は、勝者は、祖国に冠をもたらし、オresteースは、父の家の誇りを取り戻した事で関係づけられていると指摘している。

- (14) *Pyth.*1.92, *Nem.*3.76にも同様の方法での神話の中斷の箇所が見られる。S. J. Instone, *art. cit.* p.86-94も同様の見解である。
- (15) 同様の箇所は、*Ol.* 3.45, *Pyth.*3.110にも見られる。B.Gildersleeve, *op.cit.* p. 362, D.C.Young, *op.cit.* pp.1-26, J. Instone, *art. cit.* pp. 87-8も同様の見解である。
- (16) *Pyth.*3.59-62, 他に*Isth.*8.15でも同様のことが言わされている。
- (17) 「僭主」を当時の社会状況と結びつけ、特定の人物をさして批判していると言う見解は、M. Bowra, *art. cit.* pp.129-141, B.Gildersleeve, *op.cit.* p.362, アトレウスの人々を指していると言う見解は、D.C.Young, *op.cit.* pp.1-26, R.B.Egan, *art.cit.* pp.189-200 S. J. Instone, *art. cit.* pp.86-94, J. K. Newman, Pindar, Soln and Jralousy; Political Vocabulary in the Eleventh Pythian , *ICS.* vol.7, 1982. pp.189-195, F. S. Newman, *art.cit.* pp.44-64, D. E. Gerber, *art.cit.* pp.21-26, T. K. Hubbard, *art.cit.* pp.343-351.
- (18) *Pyth.*8.1-12, *Fr.*99b, *Pyth.*1.72, *Ol.*4.17-20
- (19) *Paeon.*2.19-22. *Pyth.*4.293-297, 拙書「『ピューティア祝勝歌』第8におけるヘーシュキアー、ディカー、ハルモニアについて」『文明研究』第13号 (1994)。
- (20) *Pyth.*1.72, *Pyth.*10.36, *Pyth.*13.10
- (21) 他に人間の嫉妬については、*Ol.* 8. 55, *Pyth.* 7. 19, *Pyth.*1.85, *Paeon* 2.55, *Pyth.*2.90, *Ol.*1.47, *Nem.*8.21, *Isth.*2.43, *Ol.*6.74。
- (22) 他に神々の嫉妬については、*Ol.*13.25, *Pyth.* 8.72, *Pyth.*10.20。神々の嫉妬と人間の嫉妬については、J.K.Newman, *art.cit.* pp.189-195に詳しい。
- (23) B.Gildersleeve, *op.cit.* p. 363は、 $\phi\theta o\nu e\rho o i$ を神々と人間両方を含んでいると解釈しているが、 $\phi\theta o\nu e\rho o i$ を29行と同様に市民の嫉妬という解釈は、D.C.Young, *op.cit.* pp.1-26, S. J. Instone, *art. cit.* pp.86-94, D. E. Gerber, *art.cit.* pp.21-26, T. K. Hubbard, *art.cit.* pp.343-351を始め多い。
- しかし、この箇所は、考察してきたように「神々の嫉妬」アイスキユロスの「アガメムノーン」にも「神々の嫉妬」(450, 830) と「人間の嫉妬」(904, 947) 両方への言及があり、この作品との関係については、次の機会に考察したい。
- (24) D.C.Young, *op.cit.* pp.1-26, T. K. Hubbard, *art.cit.* pp.343-351は、この作品がアトレウス家で表される高貴な人々とそうでない人々の対比であるとし、D.E.Gerber, *art.cit.* pp.21-26は、この作品は、繁栄している嫉妬を起こさせる者と貧しい悪口を言う人々の対比と考えている。S. J. Instone, *Pythian* 11: *art.cit.* p.86-94は、勝者の成功は、共同体と分かち合うので妬まれないが、僭主の幸福は市民と分かち合わないので妬まれる解釈している。

(25) *Pyth.9.78-83*

(26) ポリュネイケースとカストールが、勝者の一族と対比されているという見解は、F. J. Nisetich, *op.cit.* pp. 219-220。F.S.Newman, *art.cit.* pp.44-64も、この作品は、勝者と勝者の市民に当てられているとし、オレステースも含めたアトレウス家、自分の家を滅ぼしたが、彼らの一族には、ポリュネイケースとカストールもいることを表しているとしている。また、J.K.Newman, *art.cit.* pp.189-195は、流血による不正と無欲の寛容さを表す兄弟ポリュネイケースとカストールの正義、そして市民の嫉妬が描かれているとしている。M. Bowra, *art.cit.* p.134, B. Gildersleeve, *op.cit.* p.363は、スパルタとテーバイの同盟を期待していると解釈している。

テキストは、C.M.Bowea, *Pindari Carmina*, Oxford, 1968を使用した。